長洲町立長洲小学校　校長便り　№１６３

みんなの居場所

裏面の話題

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、諺、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和６年３月１１日(月)

【独り言】３月11日に寄せて

東日本大震災から今日で13年が経過した。平成23年3月11日、地震発生時に私は玉名市立伊倉小学校にいた。平成22年度は研究という仕事を中心にしていたため、放課後の時間を使って会議をしていたと記憶している。会議後に学校長から東北地方で大規模な地震が起きたらしいと告げられ、インターネットでニュースを確認したところ、その光景に愕然とした。実際に起きている事なのか、CGじゃないのかとか、我が目を疑う事しかできなかったことを覚えている。今も尚、爪痕の残る東日本であるが、時間の経過と共に、どこか自分事として捉えることが出来ない私がそこにいた。その5年後の4月、熊本地震発生。まさかの出来事に気が動転し、我を忘れかけた当時である。ライフラインが絶たれ、当たり前だと考えていた生活ができなくなることへの弱さを感じた出来事だった。

あの経験から私達は学び、教訓を発信、啓発していかなければならない立場にあると私は思う。少なくとも私は熊本市に住んでおり、両親の実家がそれぞれ益城町と西原村という状況にある。地震発生当時、滅茶苦茶になった家屋が放置され、両親の知り合いもたくさんいたそうだ。そんな場所も最近では更地になっていた。しかし、墓参の時には今でもブルーシートを見かけることがあり、完全復興のまだ途上だと感じる。私が体験したこと、周囲で起こったことをどの様に伝えていけばいいのか、正直なところイメージできない。でも、何らかのメッセージを送らなければ風化していくようにも思う。

災害は忘れた頃に…とは言うものの、私には忘れることが出来ない。私は教育に携わる者としてそれを伝えていく義務があると感じている。防災、減災の視点と、人の絆を大切にしていくことを伝えていく必要がある。

卒業前雑感　仕事

NHKの「プロフェッショナル仕事の流儀」という番組があります。この番組シリーズの前は「プロジェクトX」でした。多くの職業人の活躍に触れ、私自身が様々な仕事の有り様について知っておくためによく観ていました。

これまで、警察官、航空管制官、外科医、料理人等々、多くの仕事を見てきました。私なりにその中から何かを学ばなければならないと考えてみました。そこで感じたことは、第一に、プロフェッショナルは「仕事が好き」であることです。自分に置き換えて考えてみれば、すごく納得できます。私は教師という仕事が好きです。そういう意味ではプロを名乗れるのかもしれません。第二に、「逆境をバネにし、より良い次段階へ繋いでいく」ことができるのが、プロフェッショナルだということです。向上心を失い、停滞したらプロフェッショナルとは言えません。私達教師は、いつになっても先生と呼ばれます。そのような中にいて、問題対処能力は低いことが多い。このような点を自覚しておかないと、私達はプロ教師とはいえません。

担任時代、子供達にこんな話をしていました。「君達は小学生、４月からは中学生、さてプロの中学生とは何をなすべきなのか考えてみなさい。自ずと答えは出る。」愚痴ってなんかいられない、私達も子供達も保護者も、皆が前を向いていかなければならないのです。一人一人が持ち場をこなすことで、社会が成り立っていることが見えてくるものです。

シリーズ「自分を語る」#163

中島小学校での修学旅行の件です。

学校を出発、フェリー乗船、出港…。ん?何かついてくるぞ?　よくよく見てみると、漁船がフェリーに合わせて付いてきています。更に、今度は少し蛇行し始めました。どうやら、大漁旗を掲げているようです。暫くすると、フェリーと並走するように並ぶ位置に漁船が位置取りました。「なるほど。」思わず納得です。中島小学校区周辺の産業は依然述べたように、農業と漁業です。保護者の皆様の中にも漁業を生業とされる方々が多く、損な保護者の皆様が中島小学校修学旅行団を見送るべく、大漁旗を掲げて並走してくれているのでした。大漁旗と併せて手作りの旗も確認でき、そこには「〇〇ちゃん、行ってらっしゃい!」の文字が記されてありました。私自身、初めての光景に感激し、何枚も写真に収めたことは言うまでもありません。そういえば、長洲小学校でも昨年度の修学旅行で同じような光景がありましたね。

令和2年度、校長1年目の活動はまさに仕事に追われる状況でした。修学旅行が無事に終わり少しだけゆったりした時間を過ごしていたのですが、そんな時間は長くはありませんでした。不思議なもので、人と人との繋がりは思わぬところで繋がっているものですね。と言いますのは、実はある保護者の方からこういう問い合わせがあったのです。「校長先生は昔ナイトハイクをされていたそうですね。」と。少々面食らってしまったことを覚えています。続けて、「中島小学校でもやってくれませんか?」とも。長洲小学校でも同じようなことが展開されました。この時は、丁重にお断りしました。何故かといいますと、ナイトハイクや強歩会は私自身が担任教師時代にやっていた行事であり、児童も教職員も保護者も、相当の覚悟（はまり）が必要だからです。そのことを伝えしてお引き取り頂きました。逆にいえば、その覚悟があればやっても構いませんよということです。後日、その保護者の方がいらっしゃって、「私達もできる限りのことをしますので、やりましょう!」充分な覚悟（はまり）が感じられたので、指導者としての役を引き受けることにしたのです。こうして、中島小学校での強歩会の準備が進んでいきました。

11月に入って準備をスタートさせ、12月に告知、参加者募集と、トントン拍子に事が進んでいきました。こういった行事はどこであっても一定のニーズがあります。経験則で言えば、集団の2割は積極的参加、集団の2割は不参加、残る6割はどちらでもいいという内訳です。残る6割の中には、「友達が出るなら出てみたい。」とか「誘われたら出てみてもいいかな?」という方が多いです。実際に募集してみると、児童全体の3割強の人数が申込書を提出していました。コロナ禍ということもあり、行事を渇望していたという実態もあるのかもしれませんね。

行事実施までには様々なことを準備する必要があるのですが、事務的なことが多いので困ることはありませんでした。逆に準備する中で多くの方々との出会いがあり嬉しいことの連続でしたね。特に、地域協議会の方々との出会いは、強歩会そのものが地域に広がるという新たな流れが加速する出会いでした。　（つづく）

※　「みんなの居場所」に関するご意見ご感想をお寄せください。（「みんなの居場所」への掲載の　可　・　不可　）